

百よきニ戦^まけて、引のきぬとさわぎければ、將軍いそぎ使者ヲたてられて、那須□□ヲ罷リ向ふべしとぞ彼仰ける、那須ハ此かせんニ打出ける時、古郷の老母のもとへ、人ヲ下して、今度ノかせんニもし打死ニ仕らば、親ニさきだつ身となつて、草のかけ苦ノ下でも御歎あらんをヲ見奉らんずる事こそ思^やるも悲シク存ジ候らへと申つかはしたりければ、老母なくく委細ニ返事ヲ書^て送りける、古へより今ニ至る迄、武士ノ家ニ生ル、人名ヲおしムニ、父母ニ別レヲ悲ムといへども、只家ヲ思ヒ名ヲ恥ルゆへニ、おしかるべき命ヲすつる者也、始身體髪膚ヲ我ニ受て、殘傷さりしかば、其孝已になりぬ、今身ヲ立テ道ヲ行^て、名ヲ後ノ世ニあげば、是孝ノ終りなるべく、されば今度のかせん、あひかまへテ身命ヲカロクシテ、先祖ノ名ヲ失フべからず、是ハ元暦の古へ、那須の興一資高が壇ノうらノかせんニ扇ヲ射て名ヲあけたりし時のほろなりとて、うす紅ノほろヲ綿ノ袋ニ入てゾおくりたりける、さらでだニ戰場ニ臨ンデイツモ命ヲ輕ンズル那須□□ナレバ、老母ニ義ヲ進メられて、彌氣ヲ勵シける處ニ、將軍より別して使者をたてられて、此陣ヤブレテ難儀ニ及ブウヘハ、いそギムかハレ候らへと仰られける間、那須一義ヲモ申さず、大勢ノ引キ入テ、敵ミナイサミ進める敵ノ真中へかけいつて、兄弟三人一族郎從卅六キ一足もひかず打死ニシけるコソ、あはレナレ、

〔竹崎季長繪詞〕いよのかはの、六郎みちあり生年三十二、此ひた、れはへいけのかつせんの時、みちのぶのかはの、四郎源氏の御かたにまいりし時、きたりしひた、れなり、

〔藩翰譜^{本四上}〕北條亡びて、關白殿^{○豊臣}東山道に下り玉ひしが、忠勝を下野國宇都宮の御陣に召されて、冑一つ取出して、奥の佐藤忠信が著たりしとて、此程陸奥國より參らせたる冑なり、當時忠勝ならで、此冑著んずるもの覺えねば、賜らんとて召しけるぞと、賜ひけり、時の人羨しき事に思ひしに、忠勝が嫡子平八郎忠政^{後守}に美今年十六歳に成けるが、父に向ひ、父御は、まさしく徳川